

土を味わう男 — 金重陶陽 —

「良い土はおいしいものですね。」

男は土を手にとると、それを口に含み、かんで味を確かめた。

この男こそ、人間国宝にまでなった金重陶陽その人である。

陶陽は明治二十九年（一八九六）一月三日、備前の古い窯元の一つ金重家の長男として、岡山県和気郡伊部村（現在の備前市伊部）に生まれた。陶陽が生まれた明治時代は文明開化の時代で、西洋のものを取り入れるのに忙しくて、古くからある日本の文化が軽んじられた時代でもあった。もちろん、備前焼も見向きもされず、彼の家の生活も楽ではなかった。しかし、毎日の食べる米が満足にないときでさえ、幼い陶陽が父の仕事場の土をまたぎでもしようものなら、父にしっかり飛ばされた。



十四歳、高等小学校を卒業の年。家は依然として貧しかった。

（上級の学校へ進学したい。しかし、貧しい家はどうなるだろう。）

（自分はこの由緒ある金重家を継がなければならない。しかし、備前焼に未来があるのだろうか。）

心は揺れ動き、眠れない夜が続いた。

（よし、自分で備前焼の未来を切り開こう。自分が先祖の残してくれたものを受け継ぎ、いつまでも人々から愛さ

人間国宝：重要無形文化財保持者。演劇・音楽・工芸技術などで高度な技術を有する人が国が認定している。

文明開化：明治時代になつてヨーロッパやアメリカの近代的な文化を取り入れて、世の中の様子が変わったこと。

高等小学校：尋常小学校の後、学ぶ学校のこと。

れる作品を作ろう。)

陶陽は進学をあきらめた。十六歳のときから、一人で窯をたき、一人で焼き物を売って歩いた。ほとんど金にはならなかったが、一生懸命だった。

「金にもならないものをよくそんなに熱心にやるものだ。」

近所の人をあきれて見ていた。

「良いものはそうたやすくできるものではない。悪いものが売れるのが不思議だ。」

陶陽は言い返した。そして、焼き物や古美術品の展示会を欠かさず見て回った。

ある日、陶陽は京都の財産家を訪れた。そこで古備前を見た。

「これだ。」

人が使いやすいようにする工夫から生まれた無駄のない形の美しさと力強さがあった。その日から、茶器作りを始めた。だが、すぐに大きな壁に突き当たってしまった。

陶陽は、作った茶器を茶道の先生のところを持って行った。

「これは使い物になりませんね。表面がざらざらして茶巾が引っ掛かってしまうでしょう。」

先生は、茶器をじつとながめたりなでたりした後、そう言った。

「備前焼では良い茶器は作れない。茶道を何も知らない田舎人が茶器など作れるものか。」

人々が笑っている声が耳に入ってくる。物事の厳しさを思い知らされた。

(多くの人々に本当に愛されるものを作りたい。そして、桃山時代の古備前に追いつきたい。)

古備前：江戸時代前期
までに制作された備前
焼。

茶巾：お茶をたてる時、
茶碗をぬぐうのに用い
る麻布。

陶陽は、それから表千家の茶を習い、大阪や京都まで古備前を見に出かけた。そして、茶器を作っては考え、考えては作った。友人から、いかげんにやめるよう忠告されたが、どうしても後には引けなかった。

(何かが違う、何かが……。)

陶陽は行き詰まった。

(そうだ。土だ。土は備前焼の生命なのだ。)

それからというものの、毎日毎日、手にマメをつくりながら伊部付近の田んぼを掘りあさって土を調べた。ふと、土にも味があるのではないかと思ひ、口に含んでみた。すると場所によって土の味が違っていた。土をなめるので口の周りに泥をつけて歩いていて、おかしくなっていたと思われたこともあった。また、田んぼに穴を開けたら、水が漏って困るところからされたこともあった。まっ白に雪でおおわれた日には、スコップを握る指は凍りそう、白い息を吹きかけながら掘った。

やがて来た春、桜の満開の下でも掘り続けた。土を探し求めて、何度桜の花を見たことだろうか。しかし、なかなか思うような土は見つからなかった。疲れはてて腰をおろし、一人ため息をついた。それからどれくらいの間がたったことだろう。

(よし、もう一度四、五寸のところを掘ってみよう。)



表千家：茶道の流派のひとつ。

伊部の田んぼ：現在伊部の田んぼの下層部の干寄と呼ばれる粘土が備前焼の最高の粘土とされている。

四、五寸：一寸は約三センチメートル。四、五寸は約十二〜十五センチメートル。

気を取り直して掘り起こし、いつものようにその土を口に含んだ。みるみるうちに陶陽の目から涙があふれだした。

(おいしい。これだ。これが探し求めていた土だ。)

汗と涙と土とでぐしゃぐしゃの顔のまま、田んぼの持ち主のところに駆け込んだ。

「あの土なんです。」

ぶしつけに切り出した。

「陶陽さんかね。まあ、そこで顔を洗いなさい。」

手ぬぐいを差し出されてやっと我に返った。その土を足で踏んで、練っては小さな石粒を取り除き、練り直してはまた小さな石粒を取り除いて、一年寝かせた。やっと土の作り方を発見し、桃山時代のような土味を出すことができたときには、陶陽は三十四歳になっていた。そして、土の完成は、同時に陶陽の焼成の工夫、すなわち火への挑戦への始まりでもあった。

金重陶陽略年譜

- | | | | |
|------|-------------------------------------|------|--------------------------------------|
| 一八九六 | 備前市伊部に生まれる。本名は金重勇。 | 一九五六 | 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。 |
| 一九一〇 | 父椋陽について作陶を始める。 | 一九六〇 | 岡山県文化賞を受賞する。 |
| 一九三〇 | 古備前の美を求めて土を探し、研究して桃山調の土味を出すことに成功する。 | 一九六六 | 紫綬褒章を受賞する。 |
| 一九五二 | 北大路魯山人、イサム・ノグチらが備前を訪れ、交友を深める。 | 一九六七 | 昭和天皇・皇后両陛下の伊部行幸啓の際、ろくろで大鉢を作つてご覧に入れる。 |
| | これにより備前焼が全国的な視野で評価されるようになる。 | 同年 | 没する。（七十二歳）勲四等旭日小綬賞受賞を受賞する。 |

焼成：火の温度の上げ下げをすることにより、作品の肌に変化をつけること。陶陽は火の性格をよく知っており、「窯焚きの名人」と呼ばれた。

1 主題名 強い意志を持って〔A 希望と勇気、克己と強い意志〕

2 ねらい

目標に向かってやり抜くために大切な気持ちを考える中で、やり遂げようとする強い意志で困難を乗り越えようとする前向きな気持ちが大切なことに気づき、目標に向かって粘り強く着実にやり遂げようとする態度を養う。

3 主題設定の理由

(1)内容項目について

本時で取り上げる内容項目は、A 希望と勇気、克己と強い意志「より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。」である。

人間としてよりよく生きるには、目標や希望をもつことが大きな力となる。身近で日常的な努力によって達成できる小さな目標であっても、それが達成された時には満足感を覚え、自信と次に向けて挑戦しようとする勇気をもつことができる。さらに、それらがより高い目標へ向かう意欲を生み、新しい可能性を切り拓く原動力となっていく。

第2学年では、一つのことに打ち込むことの素晴らしさを知るとともに、最後までやり抜く強い意志の大切さに気付かせたい。そして、目標や夢に向かって粘り強く努力しようとする態度を育てたい。

(2)生徒の実態について

本学級の生徒は、素直で仲が良く、行事等の際には目標に向かって、助け合い励まし合いながら協力して活動ができる。しかし、小規模校で家庭や地域に守られているがゆえに、日々の生活の中では、粘り強く頑張ることが苦手だったり、困難にぶつかるとすぐに諦めてしまったりするといった、甘い気持ちを持ち合わせている。また、挫折や失敗を回避するために安易な選択をしたりすることもある。

そこで、目標達成のために、少々の困難にくじけることなく、最後まで粘り強くやり通す強い意思と態度を育てていきたい。

(3)教材について

本教材は、備前焼窯元六姓のひとつ「金重家」に生まれ、備前焼で初めて国の重要無形文化財（人間国宝）になり、「備前焼中興の祖」と呼ばれる金重陶陽の生き方を取り上げたものである。

桃山時代の古備前の再興のため、特に土を求め、自分の力の及ぶ限りの努力を尽くした陶陽の生き方に着目させ、時にはくじけそうになりながらも、より高い目標の実現に向けて努力していくことの大切さに気付かせたい。

4 板書例

めあて
目標に向かってやりぬくには
どんな気持ちが必要なのか考えよう
土を味わう男 — 金重陶陽 —

金重陶陽
の写真

由緒ある家を継ぐ決意・・・十六歳
古備前との出会い「これだ。」
茶道の先生「使いたい物にならない。」
友達の忠告「やめるように」
「あきらめるわけにはいかない。」

「土だ。」

あきらめ
○田んぼでため息
・どんなに努力しても見つからない。
・いつまで続ければいいのかわからない。
・もう無理かも知れない。

○田んぼで「涙」
・やっと思つた。
・あきらめなくてよかった。
・今までのことは無駄ではなかった。

土の完成・・・三十四歳

人間国宝・・・六十歳

○陶陽が頑張ったのはどんな気持ちからか。
・認められる備前焼を作りたい。
・多くの人に愛される物を作りたい。
・古備前を復活させたい。
・自分が理想とする備前焼をつくりたい。
・何としても頑張りたいという強い気持ちがあった。

○陶陽から今の自分へのメッセージ

5 他の教育活動との関連

美術科（表現）

6 学習指導過程

○は基本発問 ◎は中心発問

学習活動	主な発問と生徒の反応	指導上の留意点
<p>1 目標に向かって取り組む時の気持ちについて話し合い、本時のめあてをつかむ。</p>	<p>○ 自分は目標に向かって粘り強くやり抜く方だと思えるか、あきらめてしまう方だと思えるか。 ○ あきらめてしまった時、どのようなことを思ったか。 ・もっと続けておけばよかった。 ・これからはもう少し努力したい。</p>	<p>・心情円を使って、意思表示をさせる。 ・誰にでも途中で諦めてしまった経験があることを押さえ、後悔する気持ちをもとに学習課題につなぐようにする。</p>
<p>目標に向かってやり抜くにはどんな気持ちが必要なのか考えよう。</p>		
<p>2 教材「土を味わう男」を読んで、陶陽の気持ちについて話し合う。</p> <p>(1) 探し求めていた土がなかなか見つからないとき</p> <p>(2) 探し求めていた土をやっと見つけ出したとき</p> <p>(3) 陶陽の行動を支えた気持ち</p> <p>3 これまでの自分を振り返る。</p> <p>4 まとめをする。</p>	<p>○ 土を探し、田んぼでひとりため息をついている時にどんなことを考えていたか。 ・どんなに努力しても理想の土は見つからない。 ・いつまで続けたらよいのだろう。 ・理想の土を見つけるのは無理かもしれない。</p> <p>○ いつものように土を口にして、涙があふれ出した時、どんなことを思っていたか。 ・やっと探し求めていた土に出会えた。 ・あきらめずに探し続けてきてよかった。 ・これで理想の備前焼が作れる。 ・今までのことは無駄ではなかった。</p> <p>◎ 陶陽が頑張りが続けたのは、どんな気持ちがあったからだろう。 ・認められる備前焼を作りたい。 ・多くの人に愛される備前焼を作りたい。 ・備前焼の素晴らしさを全国に広めたい。 ・桃山時代のような古備前を復活させたい。 ・自分が理想とする備前焼を作りたい。 ・金重家の長男として、自分が未来を切り開くという強い気持ちがあった。</p> <p>○ 陶陽が今の自分にメッセージをくれたら、どんな内容のものをくれるだろうか。これまでの自分を振り返りながら考えてみよう。</p> <p>○ 「陶陽から若者へのメッセージ」に込められた思いについて考えよう。</p>	<p>・備前焼と陶陽について簡単に説明して教材を読む。</p> <p>・前向きに頑張る陶陽にも、あきらめそうになる心の弱さがあったことに共感できるようにする。</p> <p>・困難を乗り越え、苦勞の末に見つけたことで、喜びが大きかったことを押さえる。</p> <p>・グループでの話し合いや全体での話し合いを通して、困難に負けず粘り強く取り組む強い意志や前向きな気持ちの大切さについて考えさせる。</p> <p>・これまでの自分の生き方を振り返らせ、これからの自分にどのように生かしていくのか考えられるようにする。</p> <p>・陶陽の若者への言葉を提示し実践への意欲に繋げる。</p>
<p>評価の視点</p>	<p>・グループや全体での話し合いを通して多様な考えを出し合い、やり遂げようとする強い意志や困難を乗り越えようとする前向きな気持ちの大切さに気付くことができたか。</p> <p>・これまでの自分の体験を振り返り、目標に向かって粘り強く着実にやり遂げようとする意欲を高めることができたか。</p>	

7 参考資料

(1) 金重陶陽から若者へのメッセージ

「壁にぶつかることはだれにでもある。むしろ物事が分かれば分かるほど、壁に突き当たることは多くなるものだが、壁にぶつかることがすなわち次に飛躍するための足掛かりとなる。そこから次の道を切り開いていけばいいのだ。若い人には壁にぶち当たり、失敗を恐れることなく、どんどんやってもらいたいものだ。」

(2) 金重陶陽と備前焼

備前焼は、平安末期に現在の岡山県備前市伊部で成立し、鎌倉時代に現在のようになったと言われる。江戸中期には釉薬や絵付けをほどこしたのもも製作され、最盛期の頃には西日本一帯に広がった。明治期に入って安価な磁器が出回り、当時地味な生活雑器だった備前焼は急速に衰退した。しかし昭和28年頃に北大路魯山人、イサム・ノグチが備前を訪れ、金重陶陽らと交友を深めるようになり備前焼が全国的な視野で評価されるようになった。昭和31年金重陶陽が重要無形文化財（人間国宝）になったのを期に、備前焼を美術品として評価する動きが出て今に至っている。

(3) 備前焼について

備前焼は現在も大半が登り窯や穴窯で焼成されている。備前焼の土は、水田を掘り下げて、下層部にあるやや鉄分の多い「干寄(ひよせ)」という粘土を主として用いる。掘り出した粘土は2～3年風雨にさらし、これを水で戻して精製して粘土（陶土）にし、作陶まで8年くらい寝かせる。このように釉薬を使わない備前焼は特に土を大切にしている。長時間かけて焼き上げた備前焼は、その色や技法で、「胡麻(ごま)」「棧切(さんぎり)」「緋襷(ひだすき)」などに分類され、火と土の作り出す芸術は高い評価を得ている。備前焼は使えば使うほどしっとりとした色合いや艶が出て変化し、人々に愛用されている。

(4) 金重陶陽の土へのこだわり

「我々の祖先は窯の火を絶やすことなく千年の歴史を守り抜いてきた。備前焼を日本の焼き物として残してくれた。祖先に対する感謝の念をもち、土に素直に、火に素直にというのが私の信条で、小さい頃から土に感謝していた。」と貪欲なまでに土探しを徹底的にした。

また、「米より土が大事。」と土味の良さを感じ取り、良土を探し求めて田んぼを歩き回ったエピソードがある。

(5) 備前焼ひとくちメモ

(ア) 第二次世界大戦と備前焼

生活雑器として人々に愛された備前焼も戦時中には、燃料の松割木の安定供給のため軍に協力させられていた。従来銅で作られていた二宮尊徳像が武器製造のために徴発され、代用品が備前焼で作られて全国の学校に置かれた。また備前焼の頑丈なつくりを利用して、備前焼の手榴弾が作られた。

実際に使われることはなかったが、伊部の裏山で爆破の実験が行われたという。手榴弾は今でも伊部の窯元に保存されている。このことは戦争のすさまじさと物不足を感じさせる事柄である。

(イ) 「備前水甕水が腐らん」

備前焼に入れた水は腐りにくく、長持ちすると言われる。花を生けると花が長持ちし、また、金魚鉢などの水槽に備前焼の置物を入れておくと水は腐りにくく、水槽内側に付着する藻などの繁殖を抑えることができるらしい。備前焼の表面にはかすかな浸透性があり、甕は呼吸をし続けているため、中味も生き続けることができ、外側は気化熱の効果により、気温が高くても中は冷たさを保つことができると考えられている。

(6) 参考文献等

- ・『やきもの備前：歴史と風土』（山陽新聞社）
- ・『金重陶陽：人と作品』（鹿島研究所出版会）
- ・『人間国宝シリーズ9 金重陶陽』（講談社）
- ・『やきもの備前』（山陽新聞社）
- ・おかやま人物往来 金重陶陽

<http://degioka.libnet.pref.okayama.jp/mmhp/kyodo/person/toyo/touyou.htm>

- ・協同組合岡山県備前焼陶友会

<https://touyuukai.jp/>